論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号

氏　　名　NGUYEN Xuan Thi

論 文 題 目

ベトナム語の否定表現

論文審査担当者

主査　名古屋大学教授　町田　健

委員　名古屋大学教授　佐久間淳一

委員　名古屋大学教授　大室剛志

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、ベトナム語において使用される多様な否定形式および否定極性表現の機能を詳細に記述し、否定形式の選択と使用に関するこの言語の独自性を論じたものである。まず第１章では、否定語とは、否定意を表示し否定極性形式と共起することが可能な形式であると定義される。否定形式は３つに分類され、本来的に否定意を表す否定専用語、本来は否定語ではないが、否定極性形式との共起により否定の機能を持つようになる派生否定語、否定語ではない形式が結合して否定意を表示する複合否定語がある。否定形式の特性は、否定度のレベル、否定意のみの表示可能性、選択疑問文の形成可能性、否定語として単独での使用可能性などの要因によって決定される。否定専用語としては、không, chưa, chẳng, chả, ứ など 14 個があげられるが、社会制度による否定語の盛衰が見られる。派生否定語としては、đâu, gì, chi, sao, nào などの疑問詞に由来するもの、mà のような逆接の接続詞に由来するものには、否定的極性が存在しているが、cóc （蛙）, chó（犬）, khỉ（猿）, cứt（糞）, quái（鬼）のような、社会的に低い価値しか認められていない名詞を否定形式として機能させることができるという珍しい現象がある。複合否定語としては、否定語や否定極性語を含む場合と、いずれの要素も本来は否定意とは無関係の意味を表すものがある。また例外的に親族名称が単独で、軽蔑の意味を含む否定形式として機能することがある。

第２章では、否定極性表現(NPI)が考察される、NPI とは、本来的否定語と結合して特別の意味を表すようになる形式のことで、以下の３つに分類される。①特別の意味を持たないか、否定とは無関係の意味を表す語が否定語 không と結合することにより、非現実や不可能性を表すようになる「呼応 NPI」。②否定語と結合することで否定意を強調したり限定したり働きをする「修飾 NPI」。この種類の中には、対立するまたは類似する名詞を並列させることにより、強い否定意を表す表現も含まれる。③否定とは無関係の動詞や形容詞として機能する語が、否定語と結合することにより、否定意の強調、緩和、禁止などを表す「派生 NPI」。

第３章では、否定表現と事態の時間的特性との関係が論じられる。ベトナム語には動詞の時制形式がないが、否定語の意味的特性によって、事態の時間的特性が決定される場合がある。例えば、否定語 chửa は、事態が発話時点において成立していないという意味を表すため、未完了のアスペクトを表す đang と共起しない。khỏi は事態の成立の不必要を表すため、事態の成立が未来であることが分かる。

第４章では、ベトナム語と日本語の否定形式が対照される。ベトナム語の否定形式には大きな多様性があり、否定形式の起源もさまざまであるが、日本語の否定辞は基本的に「ない」のみである。他方、日本語は助詞の交替や位置により否定の焦点を表し分ける方法があるが、孤立語であるベトナム語では、文の構造や否定語の位置により表される。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

否定の機能と否定形式は、言語学において伝統的に重要な問題の１つであり、研究の蓄積も大きい。ただし、その研究は代表的印欧諸語や日本語などの言語を対象とするものが中心で、オーストロアジア語族に属するベトナム語のような言語における否定の研究は未発達であり、その意味で本論文が達成した否定語の詳細な記述には大きな価値がある。印欧語の否定形式は英語の not, no、ラテン語やイタリア語の non など、その数は極めて限定されているし、日本語の否定形式も「ない」に加えて時に「ぬ／ん」「まい」が用いられる程度である。本論文が明らかにしたような、ベトナム語で驚くほど多数で多様な否定表現が日常的に使用されているという事実は、世界の諸言語の中でも非常に特殊である。また、代表的な否定語の交替が、第二次大戦を挟む社会制度の大きな変革によって生じるという、文法形式への社会的要因の影響が指摘されていることも興味深い。否定表現の一部として選択される形式としては、フランス語の pas（1 歩）や point（点）のように少量を表す語である例が見られる程度だが、ベトナム語においては、否定極性のある疑問詞だけでなく、社会的に否定的な価値を与えられている事物を表す語が単独で否定語として機能できる。さらには、親族名称のような、社会的な価値を付与される語ですら、状況によっては否定語としての機能を持ちうるという、社会言語学的にも珍しい事実も指摘されている。

否定極性表現としては、英語の any や ever のような例がよく知られているが、ベトナム語では、「よい」を意味する形容詞、存在や所有を意味する動詞、意志を表す助動詞のような、本来否定とは無縁に思われる形式ですら、否定極性表現としての機能を獲得している。このような事実は、任意の形式が否定的機能を獲得する言語的・社会的条件とその過程を明らかにすることを目的とする研究に貴重な示唆を与えるものである。また同時に、命題の真理値を逆転させる操作であるという否定に関する単純な理解は、言語学では不十分であり、否定文が使用されるための前提としての状況や言語使用者の属性、選択された否定形式の機能などを考慮に入れなければ、否定文の意味や否定の特性を適切に分析することはできないことが、本論文の記述によって説得的に提示される。

しかし、このように難解で複雑な問題に取り組んだだけに、本論文にもいくつかの問題がある。まず、否定形式を考察することを目的としていながら、否定という現象の本質を正確に定義することに成功していない。また、本来は否定的な機能を持たない形式が、否定語または否定極性表現としての機能を獲得している理由が十分に説明できていない。ただし、このような問題点は、今後研究を進めることで克服することが可能であり、本論文の高い学術的価値を損なうものではない。

以上により、審査委員一同、一致して、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしいものと判断した。